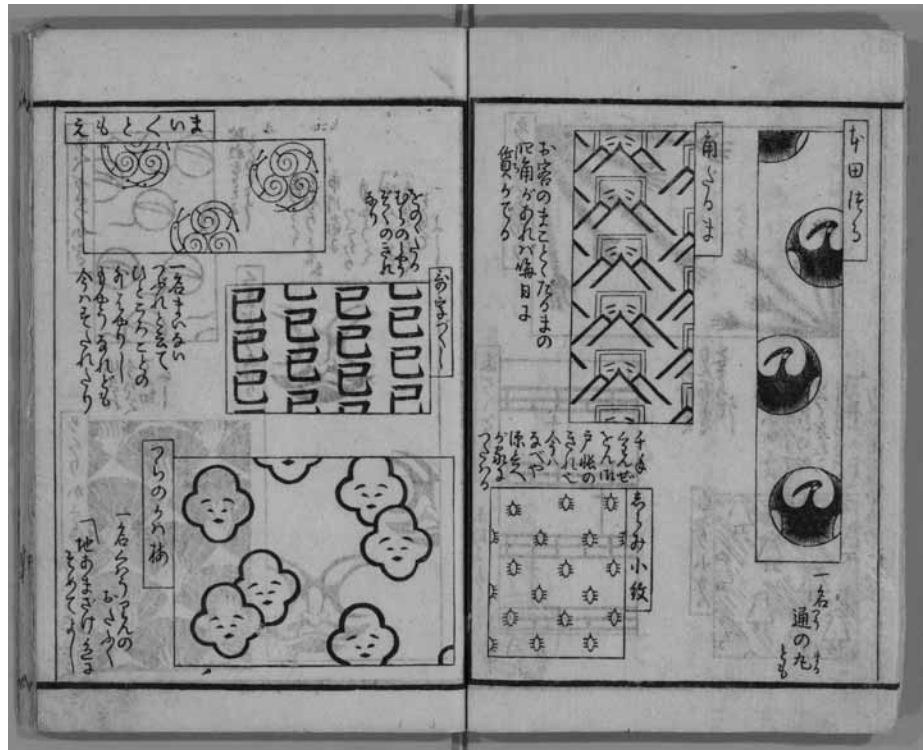


さんとうきょうでん みたて
山東京伝の見立絵本(2)
 こもんがわ
 『小紋雅話』



『小紋雅話』 1丁裏・2丁表

小紋模様の見立絵本。天明四年（一七八四）刊『小紋裁』（白鳳堂板）に、新たに二十四図を巻頭に加えた増補版で、寛政二年（一七九〇）序刊、蔦屋重三郎から板行された。基になった『小紋裁』は、京伝作画見立絵本の嚆矢とも言える作品で、これが好評であったことは、本書のような増補版が出されていることや、天明六年に、京伝が全く同じ意匠の『小紋新法』を後編として刊行したことから解る。そればかりではない。寛政四年には大阪で改竄本が京伝の名前を消して刊

行され、京伝没後の文政三年（一八二〇）、京伝の名前を削り、『小紋雅話』に更に十五図を加えた改題本が作られ、明治になってからも『小紋雅話』に新たに百四十四図を加えた署名のない本が出されている。

浮世絵師北尾政演^{きたおまさのぶ}としても活躍していた京伝ならではの、画文一体の遊びの模様。右端から、「本田つる」「一名 通の丸とも」とある、日本航空のマークのようなものは、本多鬚^{むげ}という、中剃^{なかそ}りを大きくして鬚を高く結って横に曲げた、通人の髪型を真上から見たもの。だから鶴の丸紋ならぬ「通の丸」である。次の「角だるま」は「お客の誠と達磨^{だるま}の四角があれば、晦日^{みせか}に質が出る」との説明付きである。「女郎の誠と玉子の四角」とは、無いものの喩えでよく使われるが、実はお客の方にも誠はなく、それは七転び八起きの達磨に四角がないのと同じである。借錢取りや正月の用意で、大晦日には質入れをして現金を用意するものだが、大晦日に質を出すのと同じ位あり得ないとする。遊女評判記の位取りを表す印の後ろに四角い達磨の顔が描かれる。

「しらみ小紋」は「千手観世音御帳のきれなり。今は鍋屋源兵衛が家に伝わる」とあり、千手観世音とは手が多いことからしらみの異名。鍋屋源兵衛とは、しらみ紐（しらみ除け薬入りの布紐をお腹に締めた）を売っていた店。「まいくともえ」模様には「一名まいないつぶれ」と云て、ひところ殊の外はやりし模様なれども、今は廃れたり」との説明がある。蝸牛^{かたむね}三匹が巴文に描かれ、蝸牛はまいまいつぶれとも言った。賄賂^{まわい}潰れとは賄賂^{まわい}のことで、それが横行した田沼政治が、天明六年に田沼が罷免されたため今は廃れたとする。「哥字づくし」模様には「小野篁^{おの、たかむら}の装束のきれなり」とある。『小野篁歌字点^{おの、たかむら、たじくし}』は、漢字学習のための童蒙書であり、「巳己」は「巳にかみ、己はしもにつきにけり」と歌で漢字を覚えるように工夫されている。「つらのかは梅」模様には「一名光琳のお多福・地甘酒色に染めてよし」と説明される。光琳デザインの梅に目鼻をつければお多福の顔で、甘酒を飲めば紅梅色になる、との意味か。

（山下則子）